



# 沢田内科医院 ニュースレター

## 第 58 号

### 今年も弘前四中から2人が職場体験で来ました

今年も中学生2人が沢田内科医院で4日間の職場体験を行いました。今回は、下山貴昭君と秋田龍平君の男子中学生です。下山君は弘前四中の野球部で、3年生が引退した後はレギュラーになり、1番でサードを守っています。秋田君は柔道部で、今年の中体連では最強の相手と対戦したため1回戦敗退でしたが、新人戦では自分が優勝候補だと言っています。ともに頼もしいスポーツマンです。

例年のように、外来処置室での手伝い、内視鏡や超音波検査の見学、薬局では薬を出してそろえたり器械を使って薬を包むこと、カルテをそろえるなど事務の手伝い、病棟では一緒に回診したりベッドメイキングや血圧測定、たくさんの経験をしました。今回は、外面だけでなく、患者さんがどのような気持ちでいるのかも感じて欲しいと注文をつけました。

下山君はスポーツ関係の仕事に就きたいと希望しています。野球部ではみんなで声を出し合っているようですが、慣れない医院の中ではなかなか大きな声が出ません。最

終日になりやっと大きな声で患者さんを診察室に呼び入れることができました。いろいろな仕事を体験しましたが、これまで患者さんとして来ていた時と仕事をする職員の立場になった時の違いを実感したようです。自分が受診した時には何でこんなに時間がかかるのかと思っていましたが、1人分を準備するのも大変なんだということが分かったようです。立場が変われば、それなりの理由があるということが理解できたようです。



秋田君はお父さんと同じ医師になりたいと希望しています。患者さんに、「お医者さんになるんですか？」と言われた時に、「は・・・、はい」と弱々しく返事をしていましたので、「何で、ハイッとはっきり言わないんだ」と気合を入れてやりました。きっと柔道では元気一杯声を出してやっているのでしょうけど。胃の内視鏡検査を終えた患者さんにインタビューして、検査を受ける

患者さんは、検査が痛くないかな、悪い病気があると言われるのではないかなと、前の晩は心配で眠れない人もいることを聞き出していました。

中学生が慣れない大人の中に入って、大きな声を出して体を動かすというのは大変なことです。何をすればいいかわからない、行動に自信がない、この状態では当たり前です。職場体験が目的ですから、実際に仕事を体験させるようにしています。今年は、なぜ働いているのか、どういう気持ちで働いているのかと、これまでよりも踏み込んでみましたが、ちょっとむずかしかったかも知れません。これからの考え方



4日間の体験学習が終わり、井上真利子婦長と話をしている秋田君と下山君

に少しでも役に立ってくれればと思っています。

今回は、1日が終わるたびにちょっと話をする時間を設けました。その日に×とした項目は△に、△が○になるためにはどうしたらいいかを確認し、翌日にやりたい希望も確認しました。井上真利子婦長も体験談を話してくれました。初めは看護師になるつもりはなかったが、結果的に看護師になってよかった。どんな仕事でもやってみれば面白いものですよ、という話に聞き入っていました。日記帳には、時刻と体験内容を細かく記入していましたが、その中に、『津軽弁を教わる』という項目があり、笑ってしまいました。下山君はかなりの津軽弁の使い手です。秋田君はお父さんは東京ですがお母さんが鯉ヶ沢出身なのでもう少し教えてもらうようにアドバイスしました。



最終日の昼は患者さんのメニューと同じカレーライスでした。育ち盛りのスポーツマンです。二人とも大盛りのカレー2皿を難なく平らげてしまいました。左が下山貴昭君、右が秋田龍平君です。

最終日には、担任の先生方が様子を伺いに尋ねて来ました。先生方が帰った後に下山君に、「学校とこうして働いているのは、どっちが楽しい?」と聞くと、「働いてる方」との答えでした。「それじゃ、先生にあと2日延ばしても

らうように電話するよ」と受話器を取りながら言うと、先生が許可してくれれば1週間ずっといてもいいような顔つきでした。この状況を見て、今回の職場体験は成功だったかなと思いました。

## 職場が楽しくなければいい医療はできない

5月28日に弘前市の中学校校長会と教頭会の合同研修会で講演する機会がありました。私と同じ年代の校長先生や教頭先生たちですので、メタボ気味の人たちが少なからずいます。渋谷伯龍さんの川柳に「黄信号 飲むなやへろって うるせ医者」というのがありますが、このような場所で病気の話をしてもあまり面白くありません。そこで、『医院経営の極意 学校運営へのヒント』と題して、私が行っている医院経営の状況をお話しました。分野は違いますが、どちらも組織を運営する立場ですので、学校運営に何らかの役に立つのではないかと思います。

医院は人を相手にする仕事ですので、医療技術よりも患者さんの真意を汲み取るコミュニケーションの方が重要性であること、雑談が重要であること、その他、医院経営上の細かいことを話しました。特に強調したのは、「職場が楽しくなければいい医療はできない」ということでした。患者さんには笑顔で接しなさいと職員をいくら指導しても、職員の気持ちが楽しくなければニセモノの笑顔です。決していい医療は提供できません。

『沢田内科医院は病院なのに笑い声が聞こえる。』とよく言われます。私はこのように受け止められていることを聞くと、目指している状況になっているなど感じます。病院ですから具合が悪い人たちがたくさん来ます。具合が悪くて、笑い声が聞こえることを不快に思う患者さんもいると思います。でも、医院の玄関に入ってきた状態よりは必ずいい状態で帰っていただけるように心がけていますので、この雰囲気は失わないようにしようと思っています。

学校でも同じだと思います。先生たちが楽しい職場で働いていなければ、子どもたちが楽しいと感ずる環境ができるわけがありません。私たちが子どもたちを預けている学校が楽しくなければ子どもたちが不幸です。ですから、先生たちには自分が楽しい職場で仕事をして欲しいと思います。

話はちょっとそれますが、学校の先生の一言が子どもたちには大きな影響を与えている事実をわが家の二つのエピソードで紹介します。

私の次男が小学生の頃、こんなことがありました。夏



ます。つまり、手術をすれば助かるのです。検診を受けていない人が、お腹が痛いなどの症状が出てから受診すると、リンパ節や肝臓に転移して、手術をしても再発することが多いのです。そんな人々をたくさん見てきていますので、口をすっぱくしてがん検診を勧めているのです。

今回の学会に参加してこれから準備すべきことが少し分かりました。レントゲンによる胃がん検診はここしばらく続きます。しかし、医療現場ではレントゲン検査の数は少なくなり内視鏡検査が主体となっています。沢田内科医院の場合も、内視鏡検査が1年間に約1,400件ですが、レントゲンの検査は40件ほどです。結果として、レントゲン所見を読影できる若手医師の養成がされていないということになります。対策として、胃がん検診を内

視鏡で行うこと、レントゲンの所見を読影できる若手医師を養成すること、です。どちらも容易なことではありません。検診自体は、集団検診から個別検診に移ってきています。世の中の流れを的確に判断して対策を早めに立てて実行する必要があります。

今回の消化器がん検診学会は、琉球大学の金城福則教授を会長として開かれました。金城先生は、弘前大学第1内科の私の先輩です。私が大学を卒業した新人の頃、大腸X線検査や内視鏡検査を指導してもらった記憶があります。沖縄出身の金城先生は琉球大学に移られ、沖縄の内視鏡の発展に大きな役割を果たしてきました。もちろん全国的にも活躍していますので、今回の会長を務めたわけです。私の恩師である元弘前大学学長の吉田豊先生、金城先生と奥様の4人で記念写真を撮りました。

## 医院でのこぼれ話

## 『ピンクのTシャツ』

5月のある日、わが医院の若手2羽ガラスの1人小堀未希さんとの一方的な会話です。

**私：「小堀さん、20をちょっと越えたばかりなのに、いつも年寄りくさい地味な服装をしているねえ。**

**持ってるもので赤いものといえば、車くらいしかないんじゃないか？**

**来月はボーナスがもらえるから、ピンクの下着でも買って私に見せなさい！」**

**小堀さん：「・・・・・・・・。」**

家へ帰ってお母さんに話をしたら、「ピンクのTシャツにでもしたら」と言われたという。

6月15日はボーナスの日だった。看護専門学校3年生で実習中のためウイークデイは出勤していません。19日土曜日、出番でもないのに医院へ来たらしい。後で聞くと、その日は患者さんですごく忙しそうだったので私とは会わずに帰ったのだという。ピンクのTシャツを着て、わざわざ私に見せに来たのだという。

ピンクのTシャツを着た小堀さんにお母さんは似合わないと言ったらしい。小堀さん自身も、「ピンクのTシャツは似合わない」と言っていた。ピンクのTシャツを着た小堀さんの姿を私はまだ見ていない。

断っておきますが、普通は若手3羽ガラスと言いますが、わが医院には若手と言えるのが2羽しかいない。またセクハラと言われそうだが……。准看に通っている2人のことはヒヨコと呼んでいる。来年3月には卵の殻を割って出てくる予定です。

